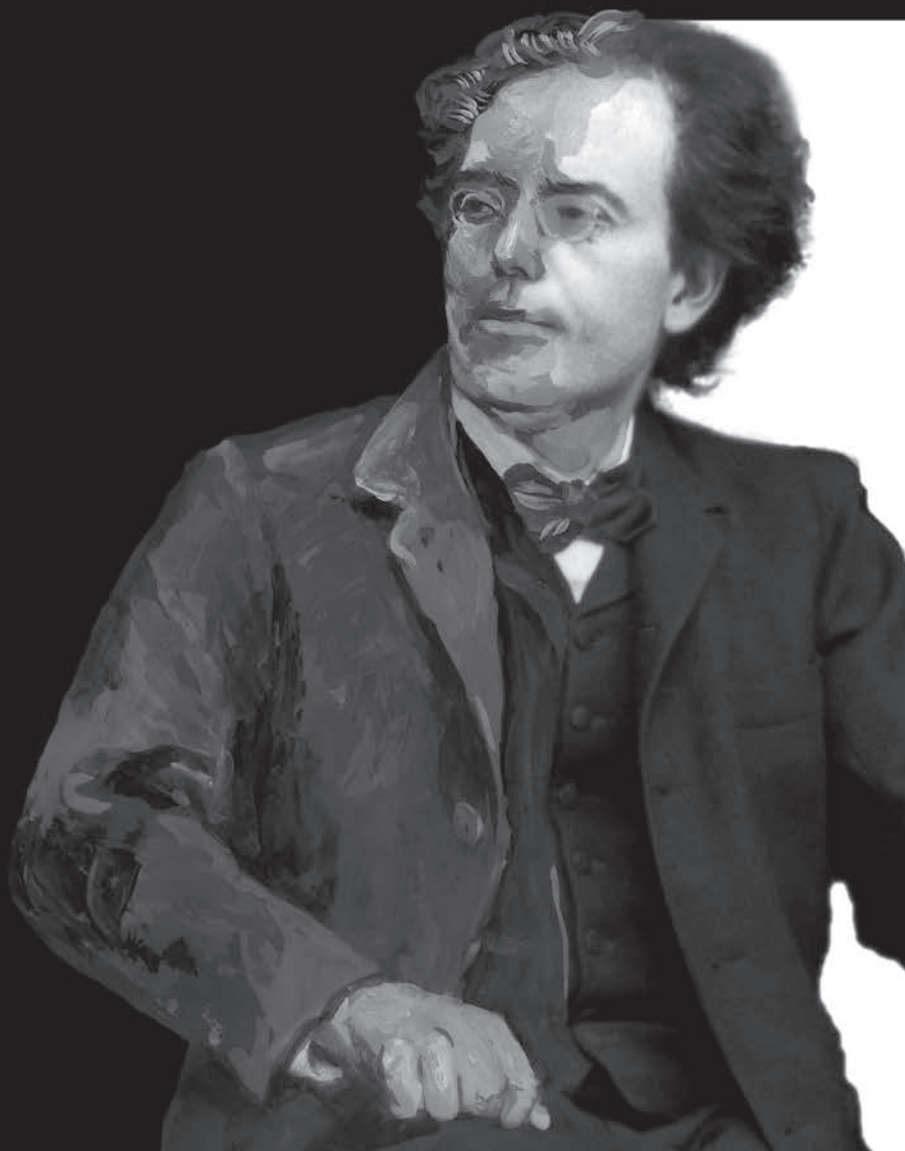
水星交響楽団
第57回定期演奏会

LEONARD BERNSTEIN
GUSTAV MAHLER



指 揮　齊藤 栄一

2018.4.30 月・祝
13:30 開演（13:00 開場）
ミューザ川崎
シンフォニーホール

ごあいさつ

本日はお忙しい中、私ども水星交響楽団（略称：水響）の演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

今回のプログラムは、20世紀アメリカ最大の指揮者・作曲家のレナード・バーンスタイン生誕100年を記念したものです。生前は、どちらかというと指揮者バーンスタインに脚光があたっていたような感がありましたが、最近では、作曲家としての才能が再認識されてきたようで、多彩な作品が演奏されるようになりました。今年3月のパーヴォ・ヤルヴィ/N響による「ウエストサイドストーリー」ミュージカル版の演奏会や、昨年夏には、井上道義/大阪フィルが、規模が大きくなかなか演奏されない「ミサ曲」を取り上げ話題を呼びましたが、水響では、2015年の没後25年に、交響曲第1番「エレミア」を演奏したほか、交響曲第2番「不安の時代」や管弦楽のためのディベルティメントなど、従来から定期的に演奏してきた作曲家です。

そのバーンスタインが最も特別な感情を持っていた作曲家がグスタフ・マーラーです。ユダヤ人としての出自や、指揮者かつ作曲家であったことなど共通項が多いこともありますが、マーラーを指揮する彼の演奏は、まさに指揮者マーラーが憑依したような激しく熱いもので、私は幸いにして1985年の日本公演（マーラー交響曲第9番）を聴くことができましたが、あの時以上に「魂を持って行かれた」と感じられた演奏会に出会ったことはありません。バーンスタインとマーラーをかねて敬愛してきたメンバーが非常に多い水響としては、生誕100周年に際してのマーラーは当然の選曲でした。

今回は水響初のゲストコンサートマスターとして、以前（第51回定演）バルトークのコンチェルトでソリストとして共演させていただいた西江辰郎さんをお招きしました。新日本フィルハーモニー交響楽団のコンサートマスターとしてご多忙にも関わらず何度も練習に参加いただき、プロのコンマスがどのように音楽をつくっていくのかを目の当たりにし毎回の練習が非常に刺激的で感動させていただきました。この場を借りまして改めて御礼申し上げます。

それではごゆっくりとお楽しみください。

水星交響楽団　運営委員長　植松隆治

本日のプログラム

LEONARD BERNSTEIN
GUSTAV MAHLER

レナード・バーンスタイン
ウェスト・サイド・ストーリーより「シンフォニック・ダンス」（約30分）

1.プロローグ (Prolog)
2.サムウェア (Somewhere)
3.スケルツォ (Scherzo)
4.マンボ (Mambo)
5.チャチャ (Cha-Cha)
6.出会いの場面 (Meeting Scene) ～クール (Cool) ～フーガ (Fugue)
7.ランブル (Rumble)
8.フィナーレ (Finale)

※ 全曲を通して切れ目なく演奏されます。

休　憩（20分）

グスタフ・マーラー
交響曲第7番 ホ短調（約80分）

第1楽章 Langsam(Adagio)-Allegro
第2楽章 Nachtmusik I (allegro moderato)
第3楽章 Scherzo
第4楽章 Nachtmusik II (andante amoroso)
第5楽章 Rondo, finale

PROFILE

水星交響楽団

水星交響楽団は、1984年に一橋大学管弦楽団の出身者を中心に結成されたアマチュア・オーケストラである。都内の主要ホール等で、定期演奏会を年2回行い、マーラー、バルトーク、ストラヴィンスキー、プロコフィエフ、ホルストなど大編成の曲に積極的に取り組んでいる。楽団の名前の由来は、一橋大学のシンボルである「マーキュリー」やセロ弾きのゴーシュの「金星音楽団」から来ている等いろいろ考えられる。

指 揮
齊藤 栄一
（さいとう えいいち）

京都大学にて音楽学を、国際基督教大学大学院にて美術史学を研究。この間、指揮法を尾高忠明、田中一嘉、円光寺雅彦の各氏に師事。1981年には京都大学交響楽団と2週間に渡り、ドイツ、オーストリアにて演奏旅行を行い、ザルツブルグ音楽祭などにて指揮。82年には関西二期会室内オペラ・シリーズ第9回公演、ブリテン作曲「ねじの回転」（関西初演）の副指揮者を務める。

84年に水星交響楽団の常任指揮者に就任。水星交響楽団、オルフ祝祭合唱団との共催で、佐多達枝振り付けのバレエ「カルミナ・ブラーナ」（95年、東京文化会館）、「ダフニスとクロエ」（99年、新宿文化センター）を指揮した。その後、「カルミナ・ブラーナ」のバレエ公演では、神奈川フィル、東京シティ・フィルも指揮している。2005年には、同曲を含むオルフの「トリオンフィ」３部作（４台のピアノと打楽器）を指揮している。

明治学院大学文学部芸術学科教授。著書に「往還する視線　14-17世紀ヨーロッパ絵画における視線の現象学」（近代文芸社）、「振っても書いてもしょせん酔狂」（水響興満新報社）がある。

ゲスト・コンサートマスター
西江 辰郎
（にしえ たつお）

新日本フィルコンサートマスター。桐朋学園ソリスト・ディプロマコース修了。辰巳明子、安永徹、Tibor Varga の各氏に師事。24 歳で仙台フィルのコンサートマスターに就任。2005 年より新日本フィルのコンサートマスター。国内外のオーケストラと共演。2009 年アールガウ響のソリストに抜擢されチューリッヒのトーンハレで演奏。ライヴC D も9 枚リリース。2015 年には久石譲の新曲「室内交響曲」の世界初演にて６弦エレクトリックヴァイオリンのソロを務め話題になった。ソロ・室内楽にも積極的に取り組み、ミッシャ・マイスキーやG. アンダローロ、Jazz の上原ひろみ等と共演。レパートリーはコレルリ、バッハから三善晃、カプースチンまでと幅広い。イタリアの作曲家アレッサンドロ・クオッツォとは友人で、無伴奏ヴァイオリンソナタなどを献呈された。

2018 年５月に初録音を含むヴァイオリンとハープの新しいCD のリリースを予定している。

http://tatsuo-nishie.world.coocan.jp/

＊＊＊

西江さんとは、3年前のバルトークのコンチェルト以来2度目の共演となります。前回は、初合わせの冒頭一音目からノックアウトでしたが、今回も初回から体や弓の使い方、タイミングなど、これがプロのコンマスか！と団員全員が西江さんの一挙手一投足に釘付けになりました。

なんと言っても新日本フィルのコンサートマスターですから、今回のことが正式に決まってからも信じられないような思いもあり、西江さんに、どういうお気持ちで今回の話を受けてくださったのかお聞きしたところ、「一生懸命熱意を持って取り組むアマチュアの皆さんと音楽に取り組むのは、プロのオーケストラで演奏するのとはまた違う楽しみがあると思いお引き受けしました。」とおっしゃってくださいました。

日本を代表するオーケストラの一つでコンサートマスターを務めていらっしゃる方と、このような形で共演できるまたとない機会。西江さんと一緒に作り上げてきた音楽をお聴き頂けることを大変幸せに思っております。

PROGRAM NOTES 1

Leonard Bernstein（*1918-1990*）

レナード・バーンスタイン
ウェスト・サイド・ストーリーより「シンフォニック・ダンス」

1. 音楽家としてのレナード・バーンスタイン

1-1.バーンスタインの平和への思い

ユダヤ系アメリカ人の両親の間に生まれたレナード・バーンスタインは、成長するのとともに、当時、世界中で起こっていた政治的対立を目の当たりにしていました。第二次世界大戦とナチズム、そして広島への原爆投下。世界平和のために美しさを創造することが芸術家の役割であり、音楽の調和で人間の調和を生み出すことが音楽家の役割であると彼が考えていたのは、重い過去を背負ったユダヤ系アメリカ人であった彼が、人類の反平和的活動を見てきた故であるかもしれません。1985年には、広島で被爆40周年を悼むための「広島平和コンサート」を開催。1989年のクリスマスには、ベルリンでベートーヴェンの交響曲第9番を指揮。ベルリンの壁崩壊を受け、第4楽章の「歓喜の歌」の“Freude”を“Freiheit（自由）”にして演奏したことが、東西冷戦の終結に向けて“音楽の調和が人間の調和を生み出す”という信条を表した一例でもあります。

彼はアメリカ初の世界的指揮者としてだけではなく、作曲家、ピアノ奏者、指導者としてマルチな才能とスター性を持っていました。今年の3月にNHK交響楽団による「ウェスト・サイド・ストーリー」の演奏会形式のステージを指揮したパーヴォ・ヤルヴィが、師匠であるバーンスタインの音楽への姿勢と人柄を表して語っている言葉を紹介します。

「『演奏する時には、その曲を自分が作曲したように』といつも言っていた」これは、バーンスタインがマーラーに対して抱いていた感情と同様です。

「彼は口癖が『～～～,baby.』だったように、普段は気さくで、とてもCoolな人だった」

今年は、バーンスタイン生誕100周年。日本でも様々なイベントが行われています。
我々も、その一端としてバーンスタインの指揮のようにノリのいい演奏をお聞かせしたいものです。

1-2.レナード・バーンスタイン 系譜

1918年8月25日　マサチューセッツ州ローレンスにて、理容関係の会社を経営し、パーマネント器具の独占販売権を得て財産家であったウクライナ系ユダヤ人移民 シュムエル・ヨゼフ・バーンスタインとジェニーとの間に生まれる。父は最初バーンスタインの音楽への興味に反対していたが、10歳ごろからピアノを習い始める
（後に父はバーンスタインのピアノへの情熱を援助するようになるのだが）

1931年　ニューイングランド音楽院に通い、ピアノをスーザン・ウイリアムズに学ぶ

1932年　コンサートでの初めてのピアノ演奏。パデレフスキ「幻想的クラコヴィアク」など

1934年　ボストンパブリックスクール交響楽団コンサートでグリーグ「ピアノ協奏曲」を演奏

1935年　ハーバード大学音楽学部に進学。ここでの指揮者ディミトリ・ミトロプーロスとの出会いによって、マーラーへの興味を抱いた。また、作曲家としての彼に大きな影響を与えたのがコープランドである。ハーバードで作曲を教わることはなかったが、のちに作曲に対して定期的にアドバイスを求めており、バーンスタインは「彼が唯一の作曲の先生だった」とも言っている

1939年　自ら作曲したアリストファドラの「鳥」の付随音楽で指揮者デビュー。ハーバード大学を卒業。カーティス音楽院に入学。これらの学校での指導者たちとの出会いが、その後のバーンスタインの音楽家としての様々な才能に影響した

1942年　交響曲第１番「エレミア」作曲。この時点ではアメリカの音楽を取り入れるというよりも、ユダヤ系という自身の出生を意識しており、ヘブライ式の聖書詠唱の旋律が全曲を通じて動機として用いられている

1943年　アウトゥーロ・ロジンスキーの元でニューヨーク・フィルハーモニー交響楽団の副指揮者に採用される。同年11月に急病のブルーノ・ワルターの代役で指揮者を務めて、大成功をおさめ、ニューヨークタイムズの表紙を飾った

1944年　ピッツバーグ交響楽団を自ら指揮して交響曲第1番「エレミア」初演。意外なことに、彼はミュージカル音楽でなく、交響曲から作曲家としてのキャリアを始めたことになる。その後バレエ「ファンシー・フリー」を作曲。台本・振り付け　ジェローム・ロビンズ、装置オリバー・スミスという作品であり、その後、彼らと「ウェスト・サイド・ストーリー」を手掛けることになる。同年ミュージカル「オン・ザ・タウン」初演

第2次世界大戦後、バーンスタインは世界中の様々なオーケストラの指揮を行う一方で、バレエ、オペラ、ミュージカル、映画音楽の作曲を行いました。これらの音楽が、ジャズの要素を多く取り入れており、多くのアメリカを舞台にした作品のイメージを表現しています。実は、上記の経歴の背後に、彼とジャズとの大きな関わりが隠されています。バーンスタインの、10代のころにジャズバンドを結成し、そこでジャズピアノを弾いたり、スイングバンドを率いたりした経験が、その後の作曲活動に影響を及ぼしています。これらがクラシック音楽とジャズやユダヤ音楽、ラテンミュージックが融合した様々な曲をもたらしたとも言えるでしょう。

「ジャズはアメリカのミュージックスタイルの究極的な表現だ」
（レナード・バーンスタイン）

以下、今回の演奏曲「ウェスト・サイド・ストーリーより『シンフォニック・ダンス』」に関係する出来事を中心に、とりあげます。

1957年	ミュージカル「ウェスト・サイド・ストーリー」初演。11月ニューヨーク・フィルハーモニック音楽監督就任
1956年	ニューヨーク・フィルハーモニックの常任指揮者にミトロプーロスと共同就任
1960年	マーラーの生誕100年の誕生日にマーラー・フェスティバルをニューヨーク・フィルハーモニックと共に行い、同年に交響曲第4番を皮切りに7年越しでマーラーの交響曲全集を録音
1961年	「ウェスト・サイド・ストーリーより『シンフォニック・ダンス』」初演（ルーカス・フォス指揮 ニューヨーク・フィルハーモニック）。同年「ウェスト・サイド・ストーリー」映画化
1990年10月14日	タングルウッド音楽祭におけるボストン交響楽団との演奏が最後の舞台となり、肺癌のためニューヨーク市内の自宅で逝去

2.「ウェスト・サイド・ストーリー」そして「シンフォニック・ダンス」

2-1.ウェスト・サイド・ストーリーのあらすじ

舞台は1950年代のニューヨークのウェストサイド。ポーランド系アメリカ人の少年グループ「ジェッツ」と、プエルトリコ系アメリカ人の少年グループ「シャークス」は、夜な夜な、なわばり争いを続けていました。今晩もグループ間での争いを警官の笛の音に止められ、警官に説教をいただいています。

ジェッツのリーダーであるリフは、シャークスとの争いに決着をつけるべく、決闘で関係をはっきりさせようと提案。それにメンバー達は賛成します。体育館で行われるダンスパーティーで、シャークスのリーダーのベルナルドに決闘の申し込みをするために、リフは元リーダーのトニーと伴にパーティーへ向かいます。

その夜、体育館のダンスパーティーでジェッツとシャークスの面々が踊っています。しかし結局、それはマンボのリズムでのダンス合戦となってしまいます。その中で出会ったトニーとマリアは瞬く間に恋におちます。そこに「妹に近づくな」という声が。その声の主はシャークスのリーダーベルナルドでした。トニーはジェッツの元リーダー、マリアはシャークスのベルナルドの妹。対立する2つのグループの間の禁断の恋でしたが、トニーはマリアを忘れられませんでした。

マリアを探していたトニーは建物の窓にいるマリアを見つけました。2人は共に気持ちを確かめ合い、次の日に会う約束をします。

一方で、決闘の提案をするためにジェッツはシャークスを待っています。しかし、メンバーはだんだん興奮し始めます。そのメンバーに向けてリーダーのリフは「落ち着け！（Cool!）」とたしなめます。決闘の条件の話し合いの結果、素手での一対一の決戦になりました。

次の日の夕方、約束をしたトニーがマリアの元にやってきます。マリアは、いくら素手での決闘であろうと争いごとはやめて欲しいとトニーに伝え、トニーは決闘をやめさせる約束をします。

その夜、ジェッツとシャークスとの決闘が始まりました。トニーは決闘をやめさせようとしましたが、さらに争いの勢いは増してしまい、ナイフを持ったベルナルドとリフの争いとなってしまいました。とうとうベルナルドがリフを刺したところに、争いをやめさせようとしたトニーは誤ってリフのナイフでベルナルドを刺してしまいます。そこに現れた警察に気づいた取り巻き達は退散しました。

その後、決闘の様子を聞いたマリアがトニーはどうなったかを聞くと、「やつが君の兄さんを殺した」という答えが。

マリアが自室の聖母マリア像に祈りを捧げているとトニーが現れ、「警察に行く」とマリアに告げます。現実世界から逃れたいトニーは、どこかに僕たちの居場所があるはず、だから2人でそこへ行こうと歌います。

一方で、シャークスがトニーの命を狙っていることを知ったジェッツたちは、トニーを探し始めます。

しばらく隠れていたトニーがマリアの姿を見つけ駆け寄ろうとした瞬間、トニーは凶弾に斃れます。倒れたトニーと彼を胸に抱いたマリアは、昨晩のように「どこかへ行こう」とお互いに語り合いますが、とうとうトニーはマリアの腕の中で息を引き取ります。

この物語は当時のニューヨーク版の「ロミオとジュリエット」とも言えます。「ロミオとジュリエット」は2つの家の対立の中、愛し合う両家の2人がもたらした悲劇を描いています。これに対してウェスト・サイド・ストーリーでは、反目しあうのは異なる人種の不良グループ。そのグループ間の抗争の中で、愛し合う2人の悲劇を描いています。

ウェスト・サイド・ストーリーの原案はジェローム・ロビンズで、バーンスタインは楽曲提供者ですが、この物語が人種間の対立を発端にしていることが、人種的問題と無関係でないユダヤ系であったバーンスタインとこの物語とのつながりをうかがわせます。

ウェスト・サイド・ストーリー

2-2.ウェスト・サイド・ストーリーより「シンフォニック・ダンス」

バーンスタインは作曲家であるシド・ラミンとアーウィン・コスタルの協力で、このミュージカルの中の主要曲を集め、「シンフォニック・ダンス」としてオーケストラのための演奏会用組曲にアレンジしました。つまり、この曲をブロードウェイからコンサートホールへと導いたのです。

フルスコアの冒頭には、シド・ラミンとアーウィン・コスタルに向けた感謝の言葉が書かれていて、各パート譜の上部にも ”To Sid Ramin, in friendship”と記されています。

「シンフォニック・ダンス」では、曲の順番が物語のそれと異なっているのに加えて、よく知られている「トゥナイト」「アメリカ」などは含まれていません。

バーンスタインの系譜の中で、彼は多くの楽曲でジャズの要素を取り入れていると記述しましたが、「ウェスト・サイド・ストーリー」では、プエルトリコ系アメリカ人たちも登場するため、ラテン音楽の要素も含まれています。

プロローグ（Allegro moderato）

敵対心が増してきている10代の青年たちからなる非行グループ ジェッツとシャークス。「シンフォニック・ダンス」ではこのプロローグが、かなり長くとられています。プロローグ前半は50年代のニューヨークのウェストサイドの街やこの青年たちの雰囲気、後半でジェッツとシャークスの小競り合いが描かれています。本日の演奏は皆様をニューヨークのウェストサイドにお連れすることができるでしょうか

サムウェア（Adagio）

マリアの兄のベルナルドを殺してしまったトニーはマリアに「警察に行く」と告げますが、マリアは一緒にいることを望み、トニーが「どこかに僕たちの居場所があるはず」と歌います

There's a place for us, somewhere a place for us.
Peace and quiet and open air wait for us somewhere.
There's a time for us, someday a time for us, time together with time to spare, time to look, time to care, someday!

（どこかに僕らの場所がある。そこでは平和と静けさと自由が私たちを待っている。いつかきっと僕らの時がくる。共に分け合い、共に見つめ、共に気遣う、そんな時が）

スケルツォ（Vivace e leggiero）

トニーとマリアがダンスを始める一方で、ギャング達は、閉鎖的な街から太陽の光で満ち溢れた明るい空に解き放たれる夢を見ます

マンボ（Meno Presto）

ダンスパーティーで2つのグループによる、マンボのリズムに乗ったダンス合戦。と、様々なあらすじ紹介には載っていますが、実際の映画のシーンでは、男女が楽しんでダンスしているようにしか見えません。映画版での「Mambo!」の掛け声は男声と女声は同じくらいに聞こえるので、女性の団員の方々はもっと声を出して！

チャチャ（Andantino con grazia）

マンボで周りが踊っている中で、トニーとマリアが初めて出会い、一緒に踊ります

ミーティングシーン（Meno mosso）

チャチャを一緒に踊ったあと、トニーとマリアが言葉を交わします

クール～フーガ（Allegretto）

決闘の提案をするためにシャークスを待っていたジェッツのメンバーは、痺れを切らしてだんだん興奮し始めます。ジェッツのリーダーのリフは興奮したメンバーに「落ち着け、クールに振る舞え」と諭します

Boy, boy, crazy boy
Get cool, boy
Got a rocket in your pocket
Keep coolly cool boy
Don't get hot
'Cause man you got
Some high times ahead
Take it slow
And Daddy-o
You can live it up and die in bed

（ボーイ、ボーイ、クレイジーボーイ、頭を冷やせよ。お前のロケットをポケットにしまっておけ。そのままクールで、熱くならずに。いよいよこれからが本番だ。ゆっくり行こうぜ。なあ、お前。楽しんで、生き延びようぜ）

ランブル（Molto allegro）

2つのギャンググループの抗争。ここでリフとベルナルドが殺されます

フィナーレ<I hove a love ～ Somewhere>（Adagio）

ベルナルドを失った恋人のアニタは、マリアに殺人を犯したトニーなどあきらめて他の人を探しなさいと言いますが、マリアはそれでもトニーを愛していると歌います

I have a love, and it's all that I have
Right or wrong, what else can I do?
I love him; I'm his
And everything he is
I am, too

（わたしには愛がある。私には愛しかない。いいことでも悪いことでも、私には何ができるの？　わたしは彼を愛してる。わたしは彼のもの。そして、彼がそうなら、わたしもそう）

そして、マリアを見つけたトニーが駆け寄ろうとした瞬間、トニーは凶弾に斃れます。倒れたトニーを胸に抱いたマリアは、サムウェアのメロディーで歌い始めます

Hold my hand
And we're halfway there
Hold my hand
And I'll take you there
Somehow
Someday
Some...

（わたしの手を握って。そこまですぐよ。わたしの手を握って。わたしがあなたを連れて行ってあげるわ。なにをしても、いつか、その...）

そして、音楽は静かに終わります

3. 調和しあう文化

誰もが憧れるニューヨーク。セントラルパークを臨むダコタ・ハウス※に、「音楽の調和が人間の調和を生み出す」と説く音楽家が住んでいた。納得のいかない青年は、音楽家のもとを訪ね、その真意を問いただそうとしていた。

※ジョン・レノンが銃殺された高級アパートとしても知られている

青年　では、あらためて質問します。音楽の調和が人間の調和を生み出すことが音楽家の役割である、というのが先生のご持論なのですか。

音楽家　ええ、音楽家の役割は単に音楽を生み出すことではないですし、人生もまた同じです。

青年　理想論としてではなく、現実の話として、そう主張されているのですか。今の音楽家、つまりミュージシャンたちは、商業主義に走り、人類全体のことなど考えてはいないではないですか。

音楽家　世間で語られているように、わたしは商業的には成功したかもしれません。しかし、自分の主張したいこと、自分のやりたいこと、自分の得意なことを曲げてまで、活動を行ったことはありません。

青年　いま、おっしゃったように、特に先生のような音楽家は、単にミュージカルや映画に合わせた音楽を作っていればよいのではないのですか。ビジネスとして成功することを目的とするならば。

音楽家　あなたは誤解をしているようですね。音楽家をはじめ芸術家たちは、誰もビジネスを行っているという意識はありません。一部のビジネスアーティストを除いて。

青年　確かに、先生の指揮は感情を押し出すこと、つまり自分の色を出すことで、多くの人々を惹きつけています。

音楽家　そうです。それが私そのものだからです。

青年　さらに、先生の作品、特にクラシック音楽は、それまでの単なるクラシック音楽ではなく、ジャズの要素などを取り入れています。それこそ自分の色を加えていることになるのではないですか。

音楽家　そうです。私は音楽家だからです。

青年　・・・

音楽家　先ほど言ったように、私の作品は私そのものです。その私はアメリカ人です。しかもユダヤの血が流れています。しかも今は幸せなことに、様々な文化の音楽に触れることができる。

青年　先生のおっしゃりたいことがわかりません。

音楽家　今までのクラシック音楽曲に、自分のバックグラウンドや自分の考えた新しい試みを取り込むことで、自分の音楽にすることができるのです。アメリカのジャズ、私の出自であるユダヤの音楽、そしてラテンの音楽など。そして、試みとして新しいオーケストレーション。サキソフォンを加えたり、多くのパーカッション楽器を使ったり、エレキギターや演説の録音を使ったり。
私が敬愛してやまないマーラーの交響曲は、新しい試みが多く含まれています。声楽をいれたり、ああ、これはベートーヴェンもやっていますが。当時使われていなかったようなパーカッションを用いたり、ハンマーを使ったり、ある交響曲では、オーケストラのメンバーより多くなるかもしれないぐらい合唱を伴ったりなど。

青年　うーん、クラシック音楽は本来の形式であるべきだと思いますが。

音楽家　是非、交響曲原理主義にならずに、心を広く持ってください。文化とは根底に流れる形式の上に、その時代に合った要素を融合させることで、常に新風を吹き込むことで、永く伝えられているのです。日本では歌舞伎でマンガの「ワンピース」を演じたり、能とコンテンポラリーダンスを組み合わせたりしています。
音楽に話を戻すと、例えば、古典主義のブラームスでさえ、ジプシー音楽に触れたことが影響しているし、ロマン派のドヴォルザークは、アメリカでの生活で知った、故郷ボヘミアの音楽とアメリカの黒人の音楽が似ていることから「新世界より」という副題をつけた曲を作ったりしています。
音楽では、単に楽器が発する音が調和することだけでなく、異なる文化の音楽や楽器が融合することによって調和が生まれると考えています。つまり、今までの形式に自分の色を融合して調和させるということです。
あと、「人間の調和」でしたね。これは、それぞれの文化同士が尊重しあったり、融合したりすれば調和が生まれるということを表しているのですが、それはまた後日にしましょう。
まずは、いろいろな音楽を聴くときでも、形式にとらわれずに音楽と作曲家自身の融合を感じてください。それらを聴いてみて何か気づいたことや疑問があれば、わたしはいつでもこの部屋におりますので、また語り合いましょう。

青年は言われた通りに様々な音楽を聴いた。音楽家の言った「音楽の調和」はある程度理解できた。「人間の調和につながる」という部分が完全に理解できていないが、彼が自分のやりたかったことが詰まった「シンフォニック・ダンス」は、オーケストラ曲をエンターテインメントに昇華させてあるが故に・・・、あ、逆だ、エンターテインメントをオーケストラ曲に昇華させてあるが故に、他人との不和は生まれにくく、「人間の調和につながる」のかなと思うことにした。だって、単純に楽しいんだもん。

青年は「人間の調和」というテーマについて、また音楽家の部屋に行って語り合いたいと思った。

※上記、第3章はフィクションです
※「die in bed」を「生き延びようぜ」と訳したのは、「die in bed」は日本語で言えば、畳の上で死ぬという意味なので、ここでは「ここで命を落とすなよ」と意訳しました

（伊集院 正宗）

PROGRAM NOTES 2

Gustav Mahler (*1860-1911*)

グスタフ・マーラー
交響曲第7番 ホ短調

1. レナード・バーンスタインとマーラー

1-1.指揮者としてのバーンスタイン

レナード・バーンスタイン生誕100周年を記念した本演奏会、メイン・プログラムはマーラーの交響曲第7番を取り上げます。

バーンスタインは、作曲家、指揮者、ピアニスト、そして教育者と、八面六臂の活躍をした正に「音楽家」でした。本日前半に演奏の『ウェスト・サイド・ストーリー』は彼の代表作ですが、この作曲家としての顔もさることながら、やはり指揮者としての彼を抜きにしてバーンスタインを語ることはできません。

彼は指揮者として生涯数多くの曲を振りましたが、その中でそれまで必ずしも超一級の評価を得ていたとは言えなかったマーラーという作曲家の作品に対して、演奏で、録音で光を当て、その評価を著しく高めて現在に至っていることはみなさまご存知のとおりです。

1-2.バーンスタインとマーラー

音楽家バーンスタインが、マーラーの作品に対して強い関心を寄せていたことは明らかですが、それはその素晴らしい音楽に惹きつけられていたこと以外に、マーラーその人とバーンスタインとの次の大きく2点の関連性があるように思われます。

ひとつは、マーラーが彼と同じユダヤ系であったこと。マーラーは1860年生まれ1911年没、バーンスタインは1918年生まれ1990年没と、それぞれが生きていた時代や地域には少なからぬ隔たりがあり、楽壇におけるユダヤ系音楽家の立場も異なっていますが、しかしそれでも「ユダヤ系であること」による扱いや処世がある種独特のものとならざるを得ず、また彼らのアイデンティティの根幹をなしたであろうことは想像に難くありません。

マーラーの作品にはユダヤ風な旋律や節回し、情念が数多くみてとれますから、バーンスタインがシンパシーを感じたのは自然なことでしょう。そしてこの「ユダヤの共鳴」のようなものは、バーンスタインのマーラー演奏にも随所に現れ、また宗教的なバーンスタインの作曲作品からもその繋がりが感じられます。

もうひとつは、マーラーが当代一流の指揮者でありながら同時に作曲家として名を成していたこと、そしてそのことに対するバースタインの憧憬の念です。マーラーは若くしてピアノの演奏に秀で、その後指揮者として、そして作曲家としても成功し歩んでいきました。バーンスタインも早くからピアニストとしてそして指揮者としてデビューを果たし、またブロードウェイ・ミュージカルにおいて人気作曲家となっていたものの、彼の根底には「正当なクラシック作曲家」として不動の名声を得ることへの願いがあり、その脳裏にマーラーの偉大な背中があったのはおそらく間違いないことでしょう。

（今日ではまだバーンスタインがクラシック作曲家としてマーラーのような評価を得ているとまでは残念ながら言えません。しかしこれまで私たち水響が取り上げてきたように、彼の素晴らしい作品がもっともっと演奏されることによって今後の評価も変わってくると確信しています。）

こうして、時にマーラーと同化しているとすら感じられるバーンスタインの迫真の演奏が生まれていきました。

特に1960年代にニューヨークフィルを主体として録音を完成させた交響曲全集はマーラー演奏における金字塔ともいわれ、また生涯3回に亘る全集（録音・録画）は今でも瑞々しく輝き続けており、彼は死してなお未来へのマーラーの伝道師であり続けています。

そして、マーラーを深く愛する我々水星交響楽団もまた、彼のマーラー演奏に触発されて産声を上げ、その後の34年に亘る歴史もその恩恵に浴していることは疑いありません。

2. 水響とマーラー

2-1.水響とマーラーの血

私たち水響はマーラー演奏のオーケストラを標榜こそしていませんが、マーラーへの愛は別格です。

それはこの楽団の創設に際してその存在が苗床となったことにはじまりますが、水響におけるこれまでのマーラーの演奏史を振り返ってみても、

1987年9月	第4番
1989年5月	第2番
1990年5月	第5番
1993年5月	第3番
1996年8月	第6番
1999年10月	第7番
2000年12月	第2番(2回目)
2001年11月/2002年1月	第5番(2回目)
2004年2月	第1番＋花の章
2007年1月	大地の歌
2010年5月	第3番(2回目)
2012年10月	第6番(2回目)
2014年5月	第2番(3回目)
2014年8月	第9番(水響としては初)
2018年4月	第7番（2回目)←本日

と、ほぼ2，3年おきにマーラーを取り上げており、今回の第7番再演によってマーラーの演奏会は実に15回目、未踏は第8番、第10番のみと、私たちはこれまでまさにマーラーとともに歩んできました。

ただこれだけでは「マーラー好きが多いアマオケ」程度かもしれませんが、ここで何よりユニークな要素は、毎年末（年始）にマーラーの第9番を演奏する文化を持つ一橋大学管弦楽団のOBオーケストラであることです。この第9番の演奏に際しては現役/OBが混在して音楽を作り上げていますが、これは同時に現役オーケストラと水響との大切な接点のひとつともなっており、私たち水響にマーラー演奏の伝統を持つ血が脈々と流れ込む母体となっています。

オーケストラにおいてはメンバーのある程度の流動は絶えず起きていますので、今回の第7番も団としては二度目とはいっても19年ぶり、もちろん今回がはじめての第7番という団員も数多く存在します。しかし、メンバーは入れ替わってもオーケストラとしてのサウンドが大きくは変わらないのは、この水響に脈々と流れるマーラーの血と愛に大きく拠っていることでしょう。

そしてこのことは練習の過程においても現れます。

多くの他の作曲家の作品は、えてして「その曲に馴染んでから肉がつく、素晴らしさに気づいていきながら磨いていく」というような、核や幹から外へ広がって膨らんでいくような練習過程を辿ることが多いのに対して、ことマーラーに限っては全く逆となります。

もともと私たちの体に確固として内在している大切なものを、あたかも仏師が原木から掘り出していくかのごとく、たとえ練習初期で荒削りであっても、マーラーのみた天使のラッパが、彼の慟哭が、表出されていくのです。

2-2.本日の演奏

さてそのようなわけで、自称「切ればマーラーの血が噴き出す」オケである我々、水星交響楽団が、レナード・バーンスタインの生誕100周年を祝って彼の作曲作品と共に、彼が心血を注いだマーラーのシンフォニーを取り上げることはある意味必然です。

また、本日は、Reinhold Kubikによる新校訂版（2007年/Boosey&Hawks）のスコアによる演奏を行います。最新の研究に基づき音や各種指示に従来版とはかなりの相違があり、前回第7番の演奏経験者はところどころで「おおっ？！」となったりしていますが、マーラーが作曲家と同時に指揮者として自作を振りながら磨き上げていったその響きをお聴きいただけるかと思います。

そしてさらに今回は、新日本フィルハーモニー交響楽団のコンサートマスター、西江辰郎さんをゲストコンサートマスターにお迎えしました。西江さんには、2015年2月のオールバルトークプログラムにて、ヴァイオリン協奏曲第2番のソリストを務めていただきましたが、今回は贅沢にもゲストコンサートマスターという、更にもう一歩我々に近い芯となって頂き、水響としても1ランクも2ランクもグレードアップした気合と結束力でお届け致します。

それでは、交響曲第7番についてみてみましょう。

3. マーラー交響曲第7番

3-1.第7番の位置付けと作曲背景

マーラーは交響曲第1番「巨人」の作曲後、第2番から第4番までの3つの交響曲には声楽を使用しましたが、第5番から第7番までの3曲は声楽を使用しない純器楽的な交響曲として書きました。そしてその後は、もはや交響曲の型から大きく離れて声楽と器楽が一体化するような第8番や大地の歌、再び器楽曲へと立ち戻って第9番、第10番へと続いていきます。

その中で、第5番～第7番の書かれた頃の彼の略歴をざっとみてみると、

1897年　37歳でウィーン国立歌劇場の芸術監督に就任、翌年からはウィーンフィルの指揮者としても活動を開始。
1899年　作曲のために山荘を建てて第4番を作曲。
1902年　アルマと結婚、長女マリア・アンナ誕生。山荘で第5番を作曲。翌年には次女アンナ・ユスティーネ誕生。この年オーストリア皇帝から第三等鉄十字勲章を授与される。
1904年　山荘で第6番を、そして第7番の第2楽章、第4楽章となる2つの「夜曲」を作曲。翌年、山荘で残りの第1楽章、第3楽章、第5楽章を作曲して第7番の完成。

と、本業の指揮者としても作曲家としても、また私生活も充実していた時期であることが窺えます。

第7番はこのような時期に作曲家としても円熟の域に達した技量をもって書かれており、中期における第5番～第7番の純器楽グループ3曲の集大成のような位置づけにあると言えます。

3-2.曲の魅力と、その構成

マーラーの交響曲は、ハイドンが確立してから続く交響曲というスタイルから、時に奇形的・肥大的とまで評されるほど大きく発展を遂げたものとなっていきますが、その大きな特徴のひとつは多元性やその様々な要素が共存して発展していくさまにあります。

またそれらが表すものはまさに森羅万象。天国的な輝きに満ち溢れたもの、死への恐怖を具現化したようなもの、こぶしの効いたユダヤ的民謡、軍隊の行進、動物たちの鳴き声、人ひとりひとりの苦悩…と、ありとあらゆるものが音楽の形を借りて現れ、その姿を変幻させて世界を広げていくのです。そして、そのどれかに軽重や貴賤があるわけではなく、マーラーが等しくそれらの存在にある種の愛を持って描いているように感じられることが、私たちがこの作曲家に惹きつけられてやまない大きな理由なのだと思います。

そんなマーラーの交響曲の中でも、この交響曲第7番はその多元性が大編成でありながらも繊細なオーケストレーションで表現されている魅力的な曲です。テナーホルン、マンドリン、ギター、カウベルなどの様々な楽器の採用もこれに一役買っています。

テナーホルン

マンドリン

さて、この曲を把握するに際しては、マーラーの他のシンフォニー同様になかなかのボリュームがありますので、まずはその大きな構成を俯瞰するとわかりやすいと思います。

第7番の楽章配置は「重量系＋夜曲①＋スケルツォ＋夜曲②＋重量系」と、スケルツォ楽章を中心として、その外側に2曲の「夜曲」（この2曲を先に作曲）、更にその外側に割と重めの両端楽章という、アーチを描くような対称的な並びになっています。

（なお、この第2楽章と第4楽章がマーラー自身によって「夜曲」（Nachtmusik）と名付けられているので、この曲全体を「夜の歌」（Lied der Nacht）と呼んだりすることもありますが、マーラーはこの交響曲自体に副題は付けてはいません。）

では楽章ごとにみていきましょう。

第1楽章
Langsam (Adagio) – Allegro risoluto, ma non troppo

序奏付きのソナタ形式で、その序奏は、ボートを漕いでいる時に着想したと言われる弦の引きずるような伴奏の上に、テノールホルンが主題を歌い出すことで始まります。そして序奏が進む中、4度の下降が印象的な第1主題のテーマが顔を見せはじめると、徐々にドライブがかかって緊張が高まっていき、なだれ込むようにホルンとチェロによるヒロイックな第1主題がついに登場、提示部が始まります。この第1主題は主要テーマとしてこの楽章で何度も登場しますが、後述するように第5楽章後半でも再登場します。このアーチ構造のシンフォニーにおいて、両サイドの楽章で同じテーマを使用してサンドイッチすることは、全体の統一感を高めることに大きな役割を果たしています。

この闘争的な第1主題から一変して、第2主題はヴァイオリンによる優しく甘い旋律。特に展開部での、静寂の後にハープの分散和音を伴って歌われる緩徐部分は、全曲中でも特に美しく陶酔的な見せ場です。しかし、そのクライマックスは、再び冒頭の伴奏に乗って現れた序奏主題によって突然断ち切られてしまいます。再現部となって各主題が扱われていくと、行進曲風になったコーダで4度下降の動機が繰り返されて次第に盛り上がっていき、トロンボーンと低弦によって巨大な第1主題が出現、最後はホ長調となって決然と終わります。

第2楽章
Nachtmusik I. Allegro moderato

「夜曲」と名付けられている第2楽章は2本のホルンの掛け合いで序奏が歌い出される、マーラーならではのファンタジーの世界。「序奏＋A＋B＋A＋C＋A＋B＋A＋コーダ」から成っています。

このホルンのテーマを様々な楽器が受け持ってA部分がはじまりますが、これが牧歌的…かと思いきや、長調と短調が入り混じって何やら不安げ。所々でどぎついアクセントが入ったり暗い影が過ったりと、一筋縄ではいかない様子で進んでいきます。まるで不思議の世界の、夜の散策のようです。

チェロによるメルヘン要素たっぷりなBの第2主題で、月明かりに照らされ花々が咲き乱れる園に踏み込み芳しい香りに包み込まれたかと思えば、Cからはオーボエによって奏される切なく物悲しい哀歌に耳を傾けます。それとも自身の想いの吐露でしょうか・・・。

再び現れた花畑はカウベルも鳴り響いて芳醇さ満開、夢の中のような美しさです。そして、合間、合間でAに戻りつつ歩んできた不思議の世界はコーダを迎え、何やら意味深にその夜の闇の中へと消えていきます。

第3楽章
Scherzo. Schattenhaft

この曲のアーチ構造の真ん中、これまたファンタジー感溢れるスケルツォ楽章です。「A＋B＋A」の三部形式。

ただ、ファンタジー、といっても先の第2楽章とはまた別の世界。また同じファンタジーっぽいスケルツォでも、メンデルスゾーンの『真夏の夜の夢』スケルツォでのティンカーベルたちの踊りのような雰囲気とはこれまた全く異なります。

「Schattenhaft（影のように）」との指示によってもたらされるその情景は、死霊やオーク、ゴブリンといった魑魅魍魎が跋扈し哭き叫ぶ舞踏で、シニカルでグロテスク、不恰好なワルツです。ベルリオーズの幻想交響曲の終楽章サバトを連想させます。

中間部Trioはニ長調でオーボエによる主題が現れて少し明かりが差し込みますが、それも短くすぐに元の「影のような」世界に引き戻されてしまいます。

目まぐるしく次々に変わる楽器、音量と音色の交差。弦楽器のミュート、ソロ、多発するグリッサンド、飛ばし弓等々が効果的に使われたり、低弦に意図的に弦を指板に叩きつけるいわゆるバルトーク・ピチカート奏法が現れたりと、随所に散りばめられたマーラーの巧みな技で不気味な踊りが演出されて、見ていても楽しめる楽章です。

第4楽章
Nachtmusik II. Andante amoroso

スケルツォを挟む、もう1つの「夜曲」。これも「A＋B＋A」の三部形式。

ヴァイオリンソロの、オクターブ跳躍が印象的な甘いテーマによって歌いだされるこの楽章は、ギターとマンドリンを伴うセレナーデ。「amoroso（愛をもって）」と書かれた、ロマンチックな夜の窓辺の愛の歌です。

ちなみにギターやマンドリンは窓辺の愛の歌の定番アイテムで、例えばロッシーニのオペラ『セビリアの理髪師』でも、始まってすぐアルマヴーヴァ伯爵がギターの伴奏に乗って窓の向こうのロジーナに愛の歌を唄います。マーラーのこのアイテムの使用は、懐古趣味、というよりひょっとしてそのアイロニーを含んだものなのかもしれません。

中間部はチェロのソロによる優しく温かい旋律で始まりますが、ハープのアルペジオと共に薄らいでいくと、再び冒頭のテーマが現れます。

室内楽的な響きのこの楽章は、影の存在が途中チラッと顔をのぞかせたりもしますが、全体に淡く優しく、幸せな雰囲気に包まれて進み、そして最後はクラリネットのトリルと三度の上昇音形を伴って静かに終わります。そして、この最終小節には通常の発想記号、伊語morendo（絶え入って）に併記する形で、「ersterbend（死に絶えてしまうように）」との指示があります。

第5楽章
Rondo-Finale. Allegro ordinario

終楽章は、「A＋B＋A＋C＋A＋B＋A＋C＋A＋B＋A＋C＋A＋[第1楽章第1主題]＋C＋A＋コーダ」の構成。ティンパニによって突然切り出され、金管による華やかなファンファーレ（A）がハ長調で輝かしく鳴り響きます。

穏やかなB主題は鼻歌を歌いながら歩くようで、途中、2回目で陰りが見えたりもしますが、深刻になることはありません。そして、このB主題と活発・快活なC主題が、ファンファーレを挟んでこの後何回も現れて進んでいきますが、後半、ホルンによって短調の第1楽章第1主題が現れ、怪しい気配が忍び寄ります。しかしそれも融合されていき、もう一度ファンファーレが鳴り響いてコーダに突入すると、もはや第1楽章第1主題は長調の輝かしい姿に変わり、鐘が鳴り響く中、ゴージャスな祝祭となってラストを迎えます。

4. 第7番と水響のこれから

4-1.その後、を語った最後のersterbend

さて、前述の通り第7番第4楽章の 最終小節には通常の発想記号であるmorendo（絶え入って）に併記する形でersterbend（死に絶えてしまうように）の記載がありますが、マーラーを演奏するにあたってこのersterbendは、単に演奏上の表現指示にとどまらず、その箇所における演奏者の心の在り方へも踏み込む、特別な指示だと思います。

そして我々水響メンバーにとってersterbendといえば慣れ親しんだ第9番の終楽章末尾を真っ先に思い浮かべ、あの最期のビオラと同じ三度の上昇音形もあって相関性を感じずにはいられませんが、この第7番第4楽章においての、ほぼ同じ意味合いであるmorendoに重ねての指示、これにはどのような意図があるのでしょうか。

このersterbendに注目して、これまで水響でも演奏してきたマーラーの交響曲を眺めてみると、

- 第２番は、第４楽章「原光（Urlicht）」の前半に一旦ersterbend、そして後半部分はGänzlich ersterbend（完全に死に絶えてしまうように）で終わり、その後、神の栄光が歌われる第5楽章。
- 第4番は、第3楽章がGänzlich ersterbendで終わり、その後、天上の生活を歌う第4楽章。
- 第7番は、第4楽章がersterbendで終わり、その後、祝典的な大団円を持って終わる第5楽章。（←イマココ）
- 大地の歌は、終楽章「告別」で「永遠に…永遠に…」と歌われながらGänzlich ersterbendで終わる。
- 第９番は、上述の通り終楽章がersterbendをもって終わる。

と、ersterbendの意図するところが朧げに見えてくるとともに、第7番より後ではersterbendで終わってマーラーはその後を描いてくれなくなってしまい、第7番のersterbendは、「死に絶えて」しまった“その後”を語ってくれた最後のersterbendであることがわかります。（なお第10番は、未完のまま死を迎えてしまうので、文字通りersterbend・・・。）

ここでの記載は控えますが、マーラーが第7番後の晩年に曲を書き進めていく中で、何が起こり、彼にどのような変化があったのでしょうか。そして、その後のersterbendは、果たしてそれまでと同じ心持ちで書き入れられていったのでしょうか・・・。

4-2.水響、マーラーへの愛の旅

本日は、レナード・バーンスタイン生誕100周年を祝して、マーラーの交響曲の中から第7番を取り上げました。

私たち水響は投票による選曲制度を取り入れていますので、これはもちろん、この素晴らしい楽曲への再演熱の高まりによる選択結果ではあります。しかし同時にこの時期のこの選曲、第7番の再演は、彼を愛し血肉と化している水響の、私たち自身へのサブリミナル・メッセージのようにも思えます。

それはつまり、晩年のマーラーの、心の深淵に迫る旅への呼び声です。

本日の再演による第7番の刻印は、水響マーラー演奏史における"ミッシングリング"、続く第8番を一層浮かび上がらせるものとなるでしょう。

もちろん、書籍他によって知識を得て、また演奏を聴くことによってそこに近づくことはできます。しかし、私たちは奏者です。

第7番によって後期作品への連続性と私たち自身の同化の過程を充分に確かめつつ、知識だけではなくその身体で演奏に取り組み、掴んで体感し、そして共鳴することで、私たち水響のマーラーに対する更なる愛が深まっていくことになるのです。

5.おわりに

2年前、国立の部室。

まだ幼い筆者の長女が、大好きな本日のティンパニ氏に「なにかたたいて！」とおねだりしたところ、彼は腕まくりして第5楽章冒頭を爆音で奏してくれました。

5秒後に泣いてしまった彼女ももう5才。今日はまだ客席には入れませんが、父が四苦八苦しながら練習する横で、折り紙で遊びながら第1楽章第1主題を口ずさむまでになりました。

地に落ちよ、一粒の麦。我も未来の伝道師たらん。

（19年前もチェロサイド　東郷 丞）

水星交響楽団　第57回定期演奏会 出演者

◆常任指揮者
齊藤 栄一

◆ゲスト・コンサートマスター
西江 辰郎

◆ファーストヴァイオリン
石川 貴隆
伊東 陽子
岡村 昂洸
加藤 峻一
亀井 亮子　◎
川原 ひかり
櫻田 雅信
志賀 優子
土屋 和隆
永井 翠
藤井 瑠夏
堀田 淳子　◎
前澤 郁弥
宮川 妙子
宮川 雅裕
米嶋 龍昌

◆セカンドヴァイオリン
池田 葵
遠藤 颯
大西 彩加
大西 一恵
奥野 大志
織井 奈津乃
片岡 拓巳
黒川 夏実
後藤 美歌
小林 美佳
篠原 麻友
杉森 賢人
砂川 湧
高原 苑
滝澤 蘭
徳地 伸保
西沢 洋
前田 啓
森 勇人　◎

◆ヴィオラ
秋枝 美咲
網中 愉香　◎
長田 玲子
川俣 英男
木村 納
蔵満 里奈子
古宇田 凱
鈴木 尚志
田中 優
前田 あゆ美
三上 さやか
水上 久美
宮﨑 千奈
山口 実

◆チェロ
大久保 雅子
北岡 正英
小林 玄季
塩谷 茉莉子
首藤 ひかり
鈴木 皇太郎　◎
橋 温子
東郷 丞
中山 憲一
中山 佐知子
日吉 実緒
能岡 雅人

◆コントラバス
阿部 洋介
石附 鈴之介
大西 功
刈田 淳司　◎
小久保 沙耶
田中 文彬
野村 美里
増渕 悠太
松永 啓佑

◆ギター
高橋 力

◆マンドリン
肝付 兼美

◆フルート
芥川 詩門
神山 真美
住岡 由梨奈
中澤 高師
本田 洋二　◎

◆オーボエ
菅野 勇斗
黒川 達郎
齋藤 暁彦　◎
寺田 吉太郎
野口 秀樹

◆クラリネット
市村 広奈
清水 樹土
藤原 誠明　◎
前中 悠輔
横地 篤志

◆ファゴット
小田中 優介
金谷 蔵人
冨井 一夫　◎
福島 知浩

◆アルトサックス
佐藤 直人

◆ホルン
伊集院 正宗
大高 直哉
岡本 真哉
島 啓　◎
田村 和俊
深村 美佳
山崎 智哉
山城 晴香

◆トランペット
淺田 健二
家田 恭介
岩瀬 世彦　◎
金子 恭江
神山 優美
戸辺 悠大

◆トロンボーン
石井 志歩
櫻井 統
佐々木 英王
佐藤 幸宏　◎

◆テナーホルン
鈴木 亮太郎

◆テューバ
植松 隆治
東海林 拓人

◆パーカッション
石川 誠
上田 祥太朗
岸 敦子
鈴木 海里
高橋 淳
椿 康太郎　◎
福田 茉由
山本 勲

◆ハープ
東森 真紀子
矢澤 みさ子

◆ピアノ・チェレスタ
山形 リサ

◆フィンガースナップ
中澤 高師

◎＝パートトップ

今回お世話になったトレーナーの皆さま

大浦 智弘
長田 雅人
佐藤 雄一
髙山 健児
西江 辰郎
林 憲秀
古野 淳
三橋 敦
柳澤 崇史

水星交響楽団運営委員会

運営委員長：植松 隆治
コンサートミストレス：亀井 亮子、堀田 淳子
弦インスペクター：川俣 英男、刈田 淳司
木管インスペクター：横地 篤志
金管インスペクター：佐藤 幸宏
打楽器インスペクター：山本 勲
総務：伊東 陽子
ステージ・マネージャー：櫻井 統
会計：金子 恭江、黒川 夏実
楽譜：伊集院 正宗、野口 秀樹、宮川 雅裕
運搬：刈田 淳司
会場：横地 篤志
広報・受付：岡本 真哉、鈴木 海里、鈴木 牧
土屋 和隆、東海林 拓人
レセプション：川原 ひかり、首藤 ひかり
インシュペクター：椿 康太郎、永井 翠
チラシデザイン：水本 紗恵子

次回演奏会

2018
11/4（日）
13:30 開演
（13:00 開場）
すみだ
トリフォニーホール
大ホール
全席自由
¥1,500

水星交響楽団 第 58 回定期演奏会

齊藤 栄一（指揮）、寺島 夕紗子 *（ソプラノ）、大木 麻理 **（オルガン）

◇三善 晃　交響三章
◇ファリャ　バレエ「三角帽子」より *
◇サン＝サーンス　交響曲第 3 番 ハ短調作品 78「オルガンつき」**

水星交響楽団 HP　http://www.suikyo.jp
問い合わせ　info@suikyo.jp / 090-1608-5749（植松）

2018
7/7（土）
夜公演
杉並公会堂
大ホール
全席指定
S 席 ¥1,000
A 席 ¥500

一橋大学管弦楽団 サマーコンサート 2018

内藤 佳有（指揮）

◇グリンカ　歌劇「ルスランとリュドミラ」序曲
◇チャイコフスキー　バレエ音楽「白鳥の湖」より抜粋
◇チャイコフスキー　交響曲第 4 番

一橋大学管弦楽団 HP　http://jfn.josuikai.net/circles/orchestra/
問い合わせ　info.hit.orchestra@gmail.com（広報：加藤）